

## 江戸という選択

国土学アナリスト  
大石久和  
Hisakazu Ohishi

東京・首都圏への一極集中が続く一方で、地方の崩壊や消滅が今後現実の問題となるとして大きな議論を呼んでいる。東京は、徳川家康の江戸開府から発展し始めたが、北海道を含む四島を眺めると、日本の中心としてずいぶんいい位置に存在しているとの感がある。

東西の位置的バランスがいいのである。江戸時代が二六〇年もの長きにわたって継続することができたのは、江戸という場所も大いに寄与しているという気がする。

## 家康は江戸開発を何から始めたのか

家康の権力掌握の過程を簡単に振り返っておこう。

- 一五九〇年 家康、江戸に移封・二五〇万石
- 一五九八年 豊臣秀吉死去
- 一六〇〇年 関ヶ原の戦い・東軍大勝
- 一六〇三年 家康、征夷大將軍の宣下
- 一六〇五年 秀忠、將軍宣下
- 家康、駿府に隠退
- 一六一四年 大坂冬の陣
- 一六一五年 大坂夏の陣、豊臣秀頼自害
- 元和偃武

家康は、一五九〇年に鎌倉円覚寺領江戸前島の対岸（日比谷入江をはさんで）の江戸城に入

城した（以下の記述は、主に鈴木理生氏の『江戸はこうして造られた』「ちくま学芸文庫」による）。

まず行ったのが、日比谷入江に流れ込んでいた平川を付け替え、道三堀にぶつけて（現在の日本橋川）、日比谷の埋め立てを準備したことだった。そして、この道三堀の隅田川から先には小名木川という海岸に沿う運河を整備した。

さらにその先には、これも海岸に沿って新川を整備して、製塩業が盛んだった行徳から江戸への塩の輸送を確実なものにした。これらの河川は現在でもその痕跡をとどめ、東京の運河として機能している。

こうして、まず塩の確保をするとともに、一六五〇年ごろに完成する利根川の東遷事業（河口が江戸湾から銚子に付け変わった）と連携した舟運による広域的な物流幹線の整備を実施したのだった。北から太平洋沿岸に沿うように運ばれてきた物資は、房総半島を迂回することなく、銚子を経て利根川を遡上して江戸に届くことになり、輸送の安全と効率が飛躍的に改善された。

引き続き行ったのが水道事業だった。鈴木氏によると、江戸城が八王子城より下の支城レベルの地位に留まっていたのは、この付近に飲料水がなかったからだといのである。その飲

料水確保のために現在の千鳥ヶ淵と牛ヶ淵の二つの飲料水ダムを整備した。

千鳥ヶ淵は小さな河川をダムによって堰き止めたのだったが、これは一九六三年の首都高速道路の工事に伴う発掘でその工法が立証された。神田上水も早くから整備されたようだが、現在の文京区関口（もともとは堰口）で神田川から導水したのは千満の影響や水路の勾配などを工夫した結果なのである。この給水用勾配は一・五二パーミル程度の緩やかなものだったという。

動力や機械力のなかった時代には、土地の傾斜や落差という「高さのエネルギー」を生かす必要があるが、江戸の技術者は都市計画に土地の高低差をうまく利用した。

天下普請になってからは、江戸城の建築や江戸の町割り、日比谷の埋め立てなどが急ピッチで進み、一六一四年には江戸のお城や区画の基本はほぼ概成した。これを見ると、八ッ場ダム一つを見ても現在のほうが何かとスローモードで資金の回転が遅いのだ。江戸人の都市計画の正しさ・土木技術の高さと整備の速度には驚きを禁じ得ない。いま高度な技術力を誇っているが、それを十分に活かしているだろうか。

## 家康は、江戸を選んだのか、押しつけられたのか

「家康は葦原が広がる貧しい漁村だった江戸を秀吉から押しつけられたが、それを見事に整備して天下の中心としての江戸に育て上げた。だからこそ神としてあがめ奉られるのは当然のことである」という、いわゆる神君神話が江戸時代に入ると作られた。

しかし、この話は家康の神格性を高めるために作り出された「家康神話」なのだというのが今日の通説のようだ。実際は、秀吉は家康の江戸への関心を見抜いていたからこそ、江戸に移封する措置をしたらしいのである。

では、なぜ家康は江戸に関心を寄せていたのかというと、前述した「鎌倉・円覚寺」が江戸前島を所領としていたことと関係がある。

古くから、伊勢・熊野と浅草・品川の港を結ぶ海岸沿いの海道が東西の物流を担っていた。その海上交通を伊勢神宮の関係者たちが行っていたことが、近年の研究で明らかになってきた。これは推測するに、海上ではつねに獲物を狙う海賊がいるが最高権威の伊勢神宮の関係者となれば海賊も強奪を手控える効果があると考えた

からではないか。

近畿・中部・関東などに広く分布する伊勢神宮の荘園のなかでもその約半分が関東に存在するように、伊勢神宮と関東の結びつきは強かった。関東の拠点港湾は古くから浅草と品川だったが、その中間点としての江戸前島は重要な位置にあたる。

こうした河川の河口部を伊勢湾でも江戸湾でもなぜか円覚寺が所領していた。円覚寺文書には、伊勢湾圏と鎌倉との日常的な海上交通の様子が記録されているという。これを浜松・岡崎方面で育ってきた家康が知らないわけがないと岡野友彦氏（「家康はなぜ江戸を選んだか」『教育出版』）は言うのである。

家康が広域物流の重要性を認識していたと考えると、江戸入りの早い段階で、平川・小名木川・新川を整備するとともに、利根川を東遷させ、近畿・中部地方と東北地方との流通の中心地としての江戸を育てようと考えたとしても不思議はない。

家康が天下人になってからも江戸に留まったことを謎だと言う学者もいるが、東北から九州までを「全国」と認識すれば日本の中心となる江戸から動くはずなどないのである。